情

薫楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
情

【Ｎコード】
Ｎ３９８４Ｅ

【作者名】
薫楓

【あらすじ】
隆と理樹は中学生からの親友だった。優が彼らの前に現れるまでは…

序

裕樹は薄汚れた微笑みを僕に向けた。友愛と欺瞞、或いは親愛と嫌悪。
「お前は、こんなにも優を傷付けて居たんだな」
僕は彼の言葉に俯いて、黙ってしまった。
僕達はあまりに人間で在りすぎるのだ。
感情を殺して、微笑めるのなら世界はもっと透明で、そして味気ないものなのだろうに。
「空が青いからといって幸せになれる訳じゃないの。少し気分が良くなるだけよ」
彼女はそう言って、僕達に背を向けた。
「隆がどんなに私を傷つけたって、それが不幸になるわけじゃないの。それは幸せな時間の中の不幸を切り取っただけなんだから」
僕は俯いていた瞳を彼女の背中に向けた。
そう、だ。感情があるから生まれる幸せも不幸も僕達から切り離せるようなものでは無い。
彼は乾いた笑い声を立てて言った。
「つまり、君は幸せだって事だ。こんな下らない男と一緒に居ても」
僕は自分を指して下らないといった裕樹を見つめた。
その表情はあまりに醜かった。さっきまでの友愛と親愛は失せ、そこには欺瞞と嫌悪だけが滲んでいた。
僕達はあるラインまでは友人だったのに、それはもう遠い過去の事のように思える。
そこに横たわっていた感情は変質してしまうのだろう。それは驚く程、簡単な事だった。
優は僕達を向き直り、言った。
「私にとって隆は素晴らしい人よ」

僕は彼女の言葉に胸が熱くなった。それはただの言葉で、けれど僕の心に響いた。
裕樹は表情をさらに歪めて言った。
「俺なら、君だけを見つめるのに、そいつは君以外の女を抱いたんだ」
事実だった。僕は優を裏切った。簡単に、欲に溺れてしまったのだった。
勿論それは優も知っている。その事を知った時の彼女の悲しそうな表情は一生忘れる事が
出来ないだろうと思う。
「だから、何？」
優は凛とした声でそう言った。その言葉の持つ勢いに裕樹は圧倒され、次に繋ぐ言葉を失ってしまったようだった。
「隆が他の女を抱いたら、私は隆に愛情を感じられなくならなければならないの？」
僕は身を引き裂かれるような思いでその言葉を聞いた。或いは、そんな罪悪感を感じさせる意図があったのかもしれない。二度と離れないように鎖を巻くように。
裕樹は肩を竦めて言った。
「それで君が幸せなら、僕はもう何も言えない」
そして、僕に視線を向けて言った。
その瞳にはもうさっきまでの欺瞞も嫌悪も浮かんで居なかった。まるで下らないものでも見るかのような冷たい、空虚な視線だった。
「良かったな、まだ彼女はお前を愛しているそうだ」
僕は裕樹の瞳を見つめ返して言った。
「友情を一つ、犠牲にしただけの事はあっただろう？」
僕はそう言うと、もう彼の瞳を見つめる事は出来なかった。深い罪悪感で気が狂ってしまいそうだった。それは優に感じるそれよりもはるかに重く、深い穴の底から絶え間無く湧き出てくるような錯覚さえ覚えるものだった。

「長い付き合いだったのにな」
一瞬、裕樹の瞳に悲しげな光が宿って、消えた。或いはそれは僕の希望的観測が見せた錯覚だけなのかもしれないけれど。
僕達は中学生からの友達だった。
そして、優が現れるまで。つまり大学生になるまではずっとお互いに親友だと思っていたのだった。

5年前

時間軸を少し戻す。
今から5年前の事だ。僕達は地元の国立大学に入学をしたばかりだった。
僕は文型で、裕樹は理系の学部。
それでもサークルは同じ軽音に入った。
ラブ&フリーという初心者でも肩身が狭くならずに済むようなサークル。
僕達は高校の文化祭で一度バンドを組んだ位の経験しかなかったから、上手い人間の集まるようなサークルに飛び込む勇気は無かった。
初めて行ったサークルの部室から聴こえてくるリズムの失われたギターを聴きながら、此処でならやっていけるだろう、と二人で笑いあったのを覚えている。

そんなサークルだから、初心者が多く集まって人数だけはそこそこにいた。
けれど、ドラムは慢性的に不足しているような、そんなサークルだった。

「俺はボーカルギターをやりたい」と、僕が言うと裕樹は
「じゃあ俺はドラムだな。高校の頃と同じように」と笑って言った。
僕達は数人居たベース希望の同級生をオーディションなんて大げさな形で持って
自分達のバンドに迎え入れた。オーディション、なんて。
僕がそう言うと裕樹は「形だけだよ」と肩を竦めた。そもそもどんなベースが上手いかさえ
良く解ってなかったのに。
それでも募集を掛けると数人が集まってきた。

じゃあ、とセッションなんて呼ぶのも恥ずかしいような音出しを繰り返してその中で一番
上手い気がした佐伯が僕達のバンドのベースになったのだった。
「何でも良いけど、パンクは嫌だ」
佐伯はそう言って眼鏡を指で持ち上げた。
僕達は、そのまま居酒屋に入って勢いであーだ、こーだとこれからどんなバンドにして行きたいかを語り合ったのだった。
酒の勢いだろう、と思う。僕達は熱く未来を語り合った。武道館なんて当たり前だ、当然世界ツアーも組まなきゃいけないなんて。
満足に楽器も弾けない癖に、と素面になって思い返すと笑ってしまうような事だった。
けれどそれは青くて、今の僕にはとても眩しい瞬間だったのだと思う。

とにかく、僕と裕樹と、そして佐伯でバンドを組んだのだった。
酷い演奏の上で僕は苛立ちを吐き捨てるように歌う。
そんな音楽はきっと求められてやいないだろうと思ったけれど、それでも本気で
自分達は才能が在ると信じていた。
青さの上に成り立つ砂上の楼閣のようなものだ。遅かれ早かれ、自分達が一体どの程度の
ものかなど解ってしまう。それまでの時間を、どれだけ引き延ばせるかだけだったのだろう。

そして、それは5年経った今もまだ引き伸ばされたままだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3984e/

情

2011年1月13日03時52分発行